

生涯教育月報

2026

春

季刊 No.140



国立西洋美術館（東京都）

評議員会・理事会および研究助成金授与式・論文入賞者表彰式開催	2
歴史研修「群馬の城めぐり」	6
美術研修「広島的美術館をたずねて」	8
プロフィール・インタビュー 株式会社 日美 代表取締役社長 大谷 裕巳さん	12



《50周年記念総会》

評議員会・理事会 および 研究助成金授与式・ 論文入賞者表彰式開催

複雑化する社会の中で、ぶれない理念を持ち続ける



▲あいさつする
北野七重理事長

2025年11月14日、The Okura Tokyoにて評議員会・理事会および研究助成金授与式・論文入賞者表彰式が行われました。評議員会では、第52期決算および第53期予算が報告され、すべて承認されました。

その後、会場を移し、50周年記念総会ならびに研究助成金授与式・論文入賞者表彰式が行われました。冒頭、財団を代表して北野七重理事長が次のようにあいさつしました。

「この50年で社会は様変わりしました。グローバル化、情報化、近年では持続可能性や多様性が重視されています。そのような中、当財団は、教育、学習支援、国際交流、地域振興など多岐にわたる事業を展開してきました。とりわけ近年では、未来を担う若い世代の育成に注力し、自ら考え行動し、新たな価値を見出せるようなプログラムを実施しています。社会が複雑化し、不確実性が高まる今、求められるのは、変化を恐れず柔軟に対応しながらも、ぶれない理念を持ち続けることです。当財団はこれからも、日本のこころと文化を尊重しながら、家庭教育、学校教育、社会教育の垣根を越えた教育の場の提供を目指していきます。」

続いて、東京都目黒区長 青木英二氏、山梨



公益財団法人 北野生涯教育振興会

- 後列左から ▶
- 桑江豊さん
 - 永松利文さん
 - 石村康生さん
 - 木村力央さん
 - 瀧沢広人さん
 - 北川雅浩さん
- 前列左から
- 三好きよみさん
 - 木下彩栄さん
 - 岩永委員長
 - 北野理事長
 - 広川智子さん
 - 鷹野和紀子さん

県笛吹市長 山下政樹氏、スタンレー電気株式会社代表取締役社長 貝住泰昭氏よりごあいさつをいただきました。

研究助成金授与式

生涯教育に関連する調査、研究を支援するための研究助成金の授与式が行われました。今回は、助成対象者11名のうち10名が出席し、一人ひとりに贈呈書が渡されました。

「認知症発症予防・進行抑制のための生涯教育の効果検証」
木下 彩栄さん
(京大大学院 医学研究科 教授)

「生成AI搭載LINEbotを用いた理学療法学生の主体的学習支援モデルの構築と評価」
桑江 豊さん
(城西国際大学 福祉総合学部 理学療法学科 准教授)

「人口減少地域におけるDXを機軸とする持続可能な複数校連携型高校教育の開発」
永松 利文さん
(鳥取大学 高等教育開発センター 教授)

「日本の製造業の活性化に向けた高大と社会人そして退職者をつなぐ工学教育」
石村 康生さん
(早稲田大学 理工学術院 総合機械工学科 教授)

「小学生のための英語『音韻認識』学習支援プラットフォームの構築」
瀧沢 広人さん
(岐阜大学 准教授)

「教師の対話指導力向上を支える学習プログラムの開発」
『ODALUP』を援用した

対話指導モデルを活かして」

北川 雅浩さん
(熊本大学大学院 教育学研究科 国語科教育講座 准教授)

講評

研究の重心は、 生涯教育の“実践”へ



研究助成金選考委員長
理事・放送大学長

岩永 雅也

今回の応募総数は107名でした。近年増加傾向にあり、本助成への関心の高まりを感じています。年代を見ると40〜50代が増え、今回はおよそ3分の2に達しました。研究者として最も活動が充実する時期の方々から、多くの応募があったことがうかがえます。職業別に見ると、教育・研究の第一線で活躍されている大学教授、准教授、助教、講師が多数を占めました。大学院生からの応募もありましたが、今回は採択には至りませんでした。若手を排除する意図はなく、今後とも若い世代を支援する姿勢は大切にしたいと考えています。

採択された研究テーマを見ると、生涯教育そのものを理論的に問う、いわゆるメタ研究は少なく、具体的な実践や方法論に踏み込んだテーマが多かった点が印象的でした。「生涯教育とは何か」を定義する段階を越え、「何を、どのような方法で、どのように学ぶのか」という実践的な関心へと重心が移っていることを感じました。

選考過程では、今後の審査のあり方についても議論がありました。一つは、書類審査のみでよいのかという点です。最終段階で判断が難しい候補者については、面接などを通じて研究の実態や意欲を確認することも検討すべきではないかという意見が出ました。もう一つは助成額についてで、昨今の物価や調査・実験にかかる費用の上昇を考えると、現行の100万円では十分とは言えず、将来的には増額も検討すべきではないかという議論がありました。

採択された皆さんには、この助成を通じて研究をさらに発展させ、成果を社会に広く還元していただくことを期待します。助成金は実際に活用され、成果が形になって初めて意味を持ちます。その趣旨をご理解いただき、今後の研究にぜひ力を尽くしていただければと思います。

「多業種・多年代の社会人に向けた領域横断型リカレント教育モデルの構築」
「オンデマンド講座を通じた生涯学習の探求」
広川 智子さん
〔長岡技術科学大学
技術革新フロンティア教育センターUEA〕

「市民が参加する宇宙線観測
CMOSセンサー搭載デバイスを
活用した科学教育と市民科学の
融合実践」
鷹野 和紀子さん
〔神奈川県立産業技術大学院大学
産業技術研究科教授〕

「多文化フィールドスタディにおける日本人学生・留学生・地域社会のインクルーシブ・リーダーシップと包摂性の醸成」
「関係性構築及び言語的支援の視点から」
木村 力央さん
〔立命館アジア太平洋大学
サステイナビリティ観光学部 教授〕

「リスクリングレディネス尺度の開発と
レディネスに応じたリスクリング
促進支援の検討」
三好 きよみさん
〔東京都立産業技術大学院大学
産業技術研究科 教授〕

助成対象者を代表して、京都大学大学院医学研究科教授 木下彩栄さんが次のように研究概要の説明を行いました。「認知症の中で約70%を占めるアルツハイマー病は、発症の20〜25年前から脳内にアミロイドβが蓄積し始めます。一方、脳内にアミロイドβが蓄積されているにもかかわらず、認知機能が保たれる症例も存在し、この状態を認知レジリエンスと呼びます。認知レジリエンスを高める要因として、教育歴や知的な余暇活動が挙げられますが、その測定の尺度はほとんど存在しません。そこで本研究では、京都大学病院の患者データと、独自の尺度を掛け合わせて、認知レジリエ



▲代表であいさつする
木下彩栄さん



論文入賞者表彰式

第47回懸賞論文入賞者の表彰式が行われました。今回のテーマは「わたしと『読書』」。全国から460編が集まり、19編が入選しました。表彰式に出席した9名の入賞者には北野七重理事長より賞状が渡されました。

第1席「語り継ぐ想いを明日へ」

新井まゆ子さん
(青森県・無職)

「家族の絆」という大切なことを、絵本を通して語り継いでくれた母。同様にその絵本を娘に語り継いだ私は病を患い、何もできなくなる。絶望の中、大切なことを伝えてくれた娘と家族の支えにより、私は少しずつ何度も一歩を踏み出し、生きる力を与えてもらった。

第2席「本が母子を繋ぐ」

狩野智子さん
(群馬県・会社員)

小学校高学年になった次男に病気が見つかった。闘病中であり少々難しい年頃で

もある彼には、家族も入り込めない孤独が存在する。けれど、私には彼と共有できる話題がある。次男には夢があり、その夢の実現を目の当たりにするために、私は今日も生きる。

第2席「エレナからの教え」

謝捷さん
(宮城県・学生)

「母のようにはなりたくない」。幼い頃から強くそう思っていた。しかし、ある小説と出会ったことで、自分自身の過去と向き合う決意をする。この小説をめくり直し、希望を無我夢中で探した。そして母との関係は、新たな章へ。

第2席「読書会という老後の楽しみ」

村上順三さん
(神奈川県・無職)

定年後の楽しみは、月に一度の読書会だ。読書会には社会人大学院時代に出逢った。普段は読まないような本を読み解き、議論を重ねる時間は人生に新たな知見と喜びをもたらしてくれる。そしてその面白さから、自分でも主催しようと考えてようになった。今まさに。

第3席「つながる読書つなげる読書」

小倉一修さん
(愛知県・会社員)

還暦を前に長年就いていた映像の世界から退き、転身を見据えて司書の資格を取得した私は、とある求人広告を見つけた。自分の原動力になっている「核」が繋いだ、馴染みの新天地での日々、そして新たな学び。あれから二十年も経つ。

第3席「私と父のあいだにあるもの」

高畑菜子さん
(宮崎県・教諭)

本を好きになったきっかけは母である。

しかしながら、その世界を広げたのは、私の視野が広がったのは父のおかげである。仕事がすべてで、思うに子どもが苦手で、そんな父との幼少期の記憶は本の読み聞かせばかり。どちらかといえば好きではある父への思いを綴る。

第3席「デジタル時代に『三四郎』を読む」

野宮健司さん
(東京都・無職)

定年も視野に入っていた頃、タブレットを購入し読書スタイルが大きく変わった。明治期の長編小説の復活版が始まったのと同時期でもあった。中学時代に映画版から興味を抱いた同作品、半世紀以上の時を経て再び相対し、デジタルの便利さと文学の奥深さの融合を知る。

第3席「読書の境界」

片岡学さん
(大阪府・社会福祉士)

読書とは、一人で味わうもの。そう信じてきた。一方、本の美しさを味わう、「読む」より「聞く」ことを楽しむパートナー。いつしか一人で味わうものが分かち合う喜びへと変わった。必要な読書に時間を割けないパートナー、代わりに自分が読んでみてもいいかもしれない。

第3席「読み聞かせてもらった私」

岡優さん
(神奈川県・教諭)

読み聞かせのボランティアに参加したのは、自分の意思ではなく母の代わりにである。嫌々始めた「仕事」であったが、いつしか次の順番が待ち遠しくなり、「絵本」と接することで見えてきたメリットや身についた経験も…。そんな生活からも卒業する日がやってきた。



北野七重理事長から賞状を授与される第1席 新井まゆ子さん

後列左から小倉一修さん、高畑菜子さん、野宮健司さん、片岡学さん、岡優さん
前列左から村上順三さん、新井まゆ子さん、耳塚委員長、北野理事長、狩野智子さん、謝捷さん

デジタル化の 今こそ輝く 読書の価値

講評



論文審査委員長
理事・お茶の水女子大学名誉教授

耳塚 寛明

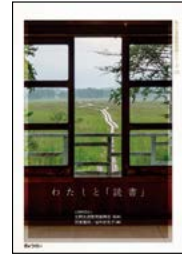
〈私の生涯教育実践シリーズ '25〉

『わたしと「読書」』

1,000円
ぎょうせい刊

ご希望の方は
(株)ぎょうせい
までどうぞ。

URL : <https://shop.gyosei.jp/>



読書は生涯学習の原点であり、学びの出発点です。今回は、論文のテーマとして読書を真正面から扱い、その成果を二冊の書籍としてまとめることができました。私はその序章を執筆しましたが、選考委員としての講評を兼ねて、内容の一部をご紹介します。

各種の調査を参照すると、近年、読書をめぐる懸念すべき動向が見えてきます。総務省によると、日本人の読書時間は21世紀に入ってから一貫して減少。1995年には1日平均約15分でしたが、2001年には約8分に落ち込みました。とりわけ10〜20代の若年層で読書離れが顕著です。要因として、デジタルメディアの影響は否定できません。

私が深刻に感じているのは、単なる読書時間の減少以上に、デジタルメディアの隆盛が、人間の知性そのものを蝕みかねない点です。2025年3月の日本経済新聞には「人間の知

性は衰退を始めたか」と題する記事が掲載されました。記事によると、OECDのPIISA調査(15歳が対象)において、読解力を含む学力スコアが2012年頃を境に低下、PIAAC調査(16〜65歳が対象)でもすべての年齢層で能力低下が見られると指摘されています。

では、子どもたちからデジタル機器を取り上げればよいかといえば、それも生産的ではありません。子どもたちはデジタル環境を、より上手に使う術を学んでいく必要があります。

今回の応募作品を通じて強く感じたのは、読書が文化的に継承される営みであるという点です。本を読んで聞かせる親と、物語の世界を想像しながら受け取る子ども。その相互行為の中で、読書習慣はもちろん、学力の基盤、世界観や生き方までも伝えられていくのです。急速に進むデジタル化の中にあつてこそ、読書の価値を改めて問い直す必要があると考えています。

プログラム

声楽：黒田 真央さん

愛知県立芸術大学大学院
音楽研究科 博士前期課程 声楽領域
(留学先のドイツより帰国)
曲目：オペラ《カルメン》より
『恋は野の鳥』(ハバネラ)



▲素晴らしい歌声を披露した黒田真央さん

フルート：三原 奏音さん

愛知県立芸術大学
音楽学部 音楽学科 器楽専攻 管打楽器コース 2年
曲目：ベンジャミン ゴダール
フルートとピアノのための3つの小品より
『第3曲 ワルツ』



▲三原奏音さんの繊細で軽やかなフルート演奏

声楽：佐伯 昌恭さん

愛知県立芸術大学大学院
音楽研究科 博士前期課程 声楽領域 1年

コントラバス：加藤 七帆さん

愛知県立芸術大学
音楽学部 音楽学科 器楽専攻 弦楽器コース 4年
曲目：W. A. Mozart作曲 コンサートアリア
『この美しき手に』



▲バリトン佐伯昌恭さんとコントラバス加藤七帆さんのコラボ

ピアノ伴奏：天野 実音さん

表彰式終了後には愛知県立芸術大学の音楽奨学生による披露演奏が行われました。美しい歌声や音色に来場者一同が酔いしれました。

音楽奨学生による披露演奏

北野生涯教育振興会創立50周年を記念して発行された『歴史研修 城めぐりのあゆみ』について、監修の小和田哲男先生よりビデオメッセージをいただきました。



『歴史研修 城めぐりのあゆみ』のご紹介



歴史研修

2025年
10月29日(水) ~
10月30日(木)

群馬の城めぐり

今回の城めぐりは、幾度となく武田信玄の攻撃を防いだ難攻不落の城として有名な箕輪城、曲輪や堀の様子が残る岩櫃城、そして急遽、訪れることになった沼田城を歴史学者の小和田哲男先生の名解説と共にめぐりました。



解説

静岡大学名誉教授
小和田 哲男氏



三の丸の石垣。城内では最も高い4.1mの石垣が確認されている。石は、城ののすぐ西を流れる榛名白川から運び上げられたと考えられている



解説をする小和田先生

箕輪城

戦国時代の上野国(現在の群馬県)は、北条氏・武田氏・上杉氏といった有力勢力の思惑が交差し、各地で攻防が続いた地域でした。高崎市にある箕輪城は長野氏の拠点として整えられ、川や沼などの自然地形に加え、空堀(水のない堀)や土塁(土の壁)を組み合わせた堅い守りを持っています

た。武田氏の侵攻を受けながらも容易には攻略されず、激しい攻防の舞台となったことが知られています。

その後、情勢の変化に伴って城主は移り、城も段階的に改修されました。特に井伊直政の時代には、石垣を取り入れるなど大規模な整備が進み、戦国の城が近世城郭へ移り変わる過程を示す点が箕輪城の特徴です。1987年には国史跡に指定され、発掘調査によって石垣の姿も明らかになりました。小和田先生は「井伊直政の時代まで、関東の城には石垣がほとんどなかった。箕輪城は、城に石垣を積むという新しい流れを作った場所」と解説しました。歩く場所によって城のつくりが変わり、戦国時代から江戸時代へ移り変わる様子が実感できるのも、箕輪城ならではの魅力です。



2階建ての櫓門が復元された郭馬出西虎口門。幅約5.7m、奥行き約3.5m、高さ約6.5m。井伊直政の時代に築かれ、櫓門としては当時の関東地方で最大規模を誇った

岩櫃城跡

群馬県吾妻郡東吾妻町にある岩櫃山は、切り立った岩肌が目を引く山です。その中腹に位置する岩櫃城は、14世紀末〜15世紀ごろに吾妻氏によって築かれたと考えられています。1565年には武田信玄の命で真田勢が攻略し、以後は真田氏の軍事拠点の一つとして重視されました。

「箕輪城語り部の会」によるご案内

なんと小和田先生が直々にご連絡をしてくださり、「箕輪城語り部の会」の方々が一緒にご案内してくださりました。また常設していない「日本100名城スタンプ」をわざわざお持ちくださり大変お世話になりました。



「箕輪城語り部の会」のみなさんと一緒に



岩櫃城本丸址をパチリ



写真では分かりにくい立派な豎堀



バス車窓からの観光となった 名胡桃城

本来訪れる予定だった名胡桃城は、前日に熊の出没情報があったため、安全を優先してバス車窓からの見学となりました。

群馬県利根郡みなかみ町にある名胡桃城は、利根川と赤谷川の合流近く、三方が絶壁となっている天然の要塞に造られた山城です。沼田氏の一族といわれる名胡桃氏が、沼田城の支城としてこの地に館を築いたのが始まりといわれています。1579年に真田勢によって攻略され、沼田城を手中にする前線基地としての役割を担いました。豊臣秀吉の天下統一の発端となる、小田原の北条攻めのきっかけになった城としても有名です。



下から見上げた岩櫃山。岩山が圧巻。
標高802.6m

gonbe/PIXTA

城跡には堀や虎口（城の出入り口）などが残り、守りを重視した造りがよく分かります。なかでも印象的なのが、中央から放射状に伸びる六本の豎堀（斜面に縦に掘った溝）です。敵が横から回り込む動きを止めるだけでなく、守る側が位置を変えながら戦うための通路としても機能しました。要所には一段高い場所があり、見

沼田城跡

群馬県沼田市にある沼田城は、1532年ごろ沼田氏によって築かれました。利根川沿いの高台にあるこの城は、関東へ至る交通の要所に位置するため、戦国大名による争奪戦の舞台となりました。岩櫃城、名胡桃城に続いて1580年には真田勢によって攻略され、以後およそ1世紀にわたって、真田氏にとって重要な拠点となります。

小和田先生は、沼田城を舞台と

張りや指揮を行う建物があったと考えられています。小和田先生からはどの位置からどのように守備を行っていたのか、臨場感あふれる解説をいただき、戦国の知恵を体感しました。



急遽訪れた沼田城で
小和田先生の話をお聴き参加者

した真田一族の逸話を紹介しました。関ヶ原合戦の際、父・真田昌幸と次男・信繁（幸村）は西軍（豊臣側）に、長男・信幸は東軍（徳川側）につきまします。その緊張のさなか、昌幸と幸村が「孫の顔が見たい」として沼田城を訪れますが、城を預かっていた信幸の妻・小松姫は入城を断り、「どうしても会いたいなら、孫を城の外に連れていきます」と申し出たといひます。



石垣と堀跡

今回の城めぐりは、立派な天守が残っている城ではありませんが、小和田先生の解説のおかげでそこに城があるかのように想像力を掻き立てられ、大変学びの多い研修となりました。



美術研修

2025年11月20日(木)~21日(金)

講師：美術研究家 沼辺 信一氏



ひろしま美術館にて



南薫造《曝書》
1945年
広島県立美術館蔵



クロード・モネ
《セーヌ河の朝》1897年
ひろしま美術館蔵

広島 の 美術館をたずねて

広島は魅力的な観光スポットが多く、美術館めぐりを目的として訪問する機会はなかなかありません。今回の美術研修は1泊2日でじっくりと美術を堪能しました。

広島県立美術館

広島市の中心部に位置し、浅野家の大名庭園である名勝・縮景園に隣接した美術館です。中国地方初の公立美術館として1968年に開館し、1996年にリニューアル・オープンしました。ガラス張りのエントランスロビーからは、縮景園の紅葉を眺めることができました。

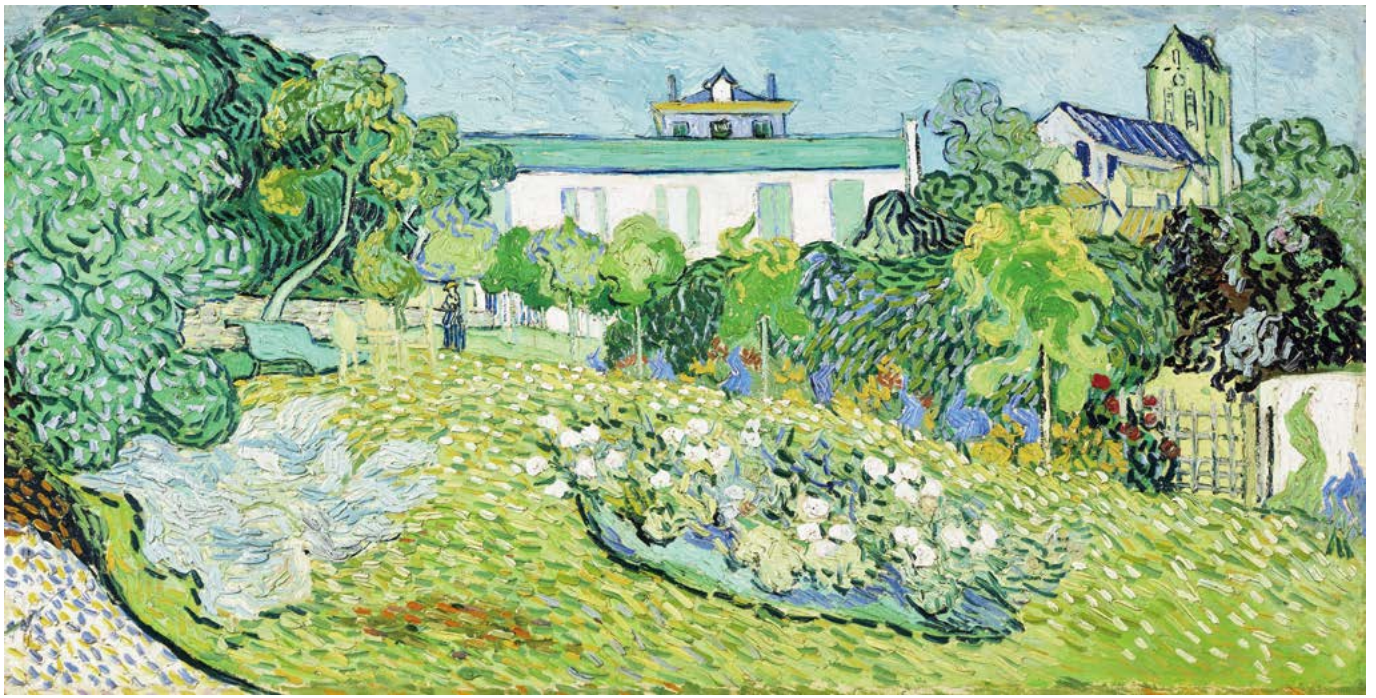
当美術館は、広島県ゆかりの美術作品や、日本とアジアの工芸作品など約5000点を所蔵しています。当日はコレクション展「過去へのまなざし、人々のいとなみ」が開催されていました。村の子どもや田植えなど、日々の暮らしを切り取った、何の気取りもない素朴で温かい日本の原風景のような絵画の数々を鑑賞しました。

併せて、特別展「ブルックリン博物館所蔵 古代エジプト」も見ることができました。彫刻、棺、宝飾品、ミイラ等、約1500点の貴重な展示とともに、最新技術を使った研究成果が映像で紹介され、古代の高度な文化と死生観に触れました。

ひろしま美術館

1978年、広島銀行が創業100周年の記念事業として設立した美術館です。「愛とやすらぎのために」をテーマに、今日の広島礎となられた原爆犠牲者の方々への鎮魂の祈りと平和への願いがこめられています。建物は、原爆ドームをイメージした丸いドーム型、本館を取り囲む回廊は、厳島神社をイメージしています。

本館にはフランス近代絵画を中心に、モネ、



フィンセント・ファン・ゴッホ
 《ドービニーの庭》 1890年
 ひろしま美術館蔵



下瀬美術館 サム・フォールズの大作を鑑賞



下瀬美術館 可動展示室の向こうに宮島を望む



沼辺先生より作品解説

世界文化遺産「厳島神社」にも参詣でき、芸術と文化を堪能した2日間でした。

下瀬美術館

ルノワール、ゴッホ、ピカソなどの作品約80点が常設展示されています。展示室へ一歩踏み入れると、名画の数々に圧倒され戸惑うほどです。中でも当美術館の代表的な作品、フィンセント・ファン・ゴッホの《ドービニーの庭》については講師の沼辺先生より詳しく解説がありました。「ゴッホが亡くなる直前に描いた作品で、感情の起伏が激しかったと言われる彼が独特の力強いタッチを用いながらも、非常に繊細で考え抜かれた色彩で描いています。色々なもの gau 傾いていても全体としては均衡がとれており不安定な要素がなく美しい。ゴッホが画家として最高潮だったことがわかる作品ですね。」

やはりゴッホはすごい、と思わせる名画でした。

広島市内から車で40分ほどの大竹市にある当美術館は、丸井産業株式会社の創業家のコレクションを中心として2023年に開館しました。特に注目されているのは個性的な建築です。瀬戸内海に面した敷地には水盤に浮かぶ8つの可動展示室があり、その外壁に瀬戸内海の風景が映り込み、建物と自然が不思議な調和を見せています。建築家 坂茂（ばん・しげる）氏によるこの建物は2024年にユネスコ「世界で最も美しい美術館」の最優秀賞である「ベルサイユ賞」を受賞しました。

当日は新コレクション展として、サム・フォールズ、松山智一による現代アートが紹介されています。新しい美術館がこれからのようなコンセプトで作品を収蔵していくのか。今後が楽しみな美術館です。

ご報告



「創立50周年記念 彫刻奨学生現在展」開催

創立50周年を記念して「2016—2024 彫刻奨学生現在展」を2025年12月11日より20日まで、目黒区美術館にて開催しました。10年ぶりの開催となる現在展は、2016年から2024年までの奨学生22名に出品いただきました。若き才能が、時代とともにどう変化し、何を刻んだのか、とても見応えがありました。詳細は秋冬号に掲載します。



歴史研修 『城めぐりのあゆみ』発刊

論文入賞者表彰式(P・5)でもご紹介しましたが、当財団創立50周年を記念して『歴史研修 城めぐりのあゆみ』を発刊しました。歴史学者 小和田哲男先生と巡った15年間の研修記録を、機関誌の記事をもとに1冊の本にまとめました。歴史や城にご興味のある方、ご希望の方がいらっしゃいましたら財団までご連絡をお願いします。



目黒区より 「図書寄贈」への感謝状受領

当財団が毎年行っている小・中学校への図書寄贈に対して、1月21日、目黒区教育委員会から感謝状を授与されました。当財団では目黒区をはじめ全国11の市区町の小・中学生の心の糧になるように、

と多くの図書を寄贈しています。これからも子どもたちの学びのきっかけになるよう図書寄贈を続けていきます。



高橋教育長(右)から感謝状を授与された
利治常務理事

お知らせ



第48回 事実に基づく小論文・エッセー募集 「わたしの挑戦」

私たちは、毎日が同じことの繰り返し返しと感ずることがあります。それは、平凡で取るに足らない日常と感ずられるかもしれません。しかし、日常こそ、実はチャレンジの絶好の機会なのではないでしょうか。

小さなことへのチャレンジが、やがて大きな成功につながることもあります。いつもと違う道を歩くのも、また人間関係を広げることにも、ある意味新たな挑戦です。挑戦にはドキドキとワクワクと同時に不安がつきものですが、一歩を踏み出したその経験は、自信につながり、生きがいとなり、平凡な日常が輝き始めるかもしれません。

たとえ失敗し、悔しくて涙したとしても決して無駄ではありません。その経験によって得られる何かを乗り越えた新しい自分との出会いは、新たな発見や学びにつながるでしょう。

もちろん、世界を変えるかのよう大きな挑戦もあるでしょう。あなた自身の自分らしい挑戦、できないと思っていたことができ、喜び、挑戦によって得られたこと、失ったことをつづってください。そこで気づいたこと、考えたことは、同じような経験をした人たちの共感を呼び起こします。また、挑戦することを迷っている誰かの背中を、そっと押すことにつながるかもしれません。挑戦は日常の中にあります。

応募規定 縦書き400字詰め
A4原稿用紙8枚〜10枚
応募システムにより応募

締切 2026年3月31日(火)

賞金

- 1席(1編) 賞状・副賞50万円
- 2席(3編) 賞状・副賞20万円
- 3席(5編) 賞状・副賞10万円
- 佳作(10編) 賞状・副賞3万円

入賞発表 2026年8月末

表彰式 2026年11月13日(金)

会場 The Okura Tokyo
(ホテルオークラ東京)
奮ってご応募ください。

奨学生募集

「学習意欲のある社会人を応援」

奨学対象

- ・科目等履修生(学生を除く)
- ・放送大学大学院修士全科目生および選科履修生(ただし28歳以上または実務経験3年以上)

申込者の中から書類選考のうえ奨学生を決定します。なお奨学金は給付で返済不要です。応募システムからご応募をお願いします。

締切 2026年5月15日(金)

〈科目等履修奨学生〉

奨学金 年間20万円

定員 15名程度

〈放送大学大学院修士全科目奨学生〉

奨学金 30万円(各年度15万円)

定員 10名程度

〈放送大学大学院選科履修奨学生〉

奨学金 年間7万円

定員 15名程度

北野生涯教育振興会

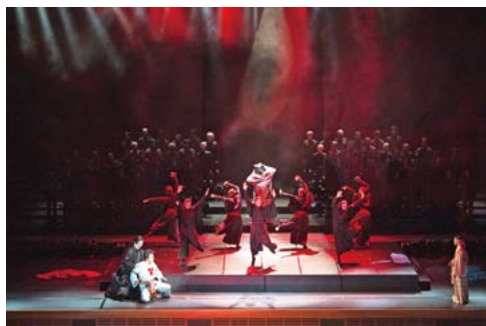
創立50周年記念

オペラ「ヤマタノオロチ」

公演

当財団創立50周年を記念して、2026年4月19日(日)にめぐろパーシモンホール大ホールで、サノオ神話に普遍性を与えた名作オペラ『ヤマタノオロチ』を10年ぶりに再演します。時空を超え、再び

現代社会に問いかける作品です。お誘い合わせのうえ、ぜひお越しください。



創立40周年公演の様子

講演会 「芸術音楽へのつばなご」 開催

日本初・女性音楽家のみで発足したプロオーケストラ 東京女子管弦楽団を講師に招き、オーケストラを構成するさまざまな楽器の特徴や奏法解説を交え、クラシック音楽をより身近に楽しみます。

日程 2026年9月5日(土)

開場13時／開演13時30分

会場

めぐろパーシモンホール 小ホール

定員

180名程度

伝承講演会 「狂言に親しむ」開催

狂言師 石田幸雄氏他(万作の会)を講師に招き、「狂言」の基礎知識を学び、「柿山伏」「附子」を鑑賞し、所作・台詞を体験します。600年の歴史を持つ古典芸能「狂言」の魅力を存分に味わいます。

日程 2026年7月11日(土)

開場13時／開演13時30分

会場

めぐろパーシモンホール 小ホール

定員

180名程度



柿山伏



こ・ち・ら・編 集 室

最近、PC画面に並ぶ広告や記事が、まるでこちらの会話を盗み聞きしているかのようになってしまう。とって付な内容で、「何で知っているの?」と問い詰めたくなる瞬間があります。様々なオンライン行動から推測アルゴリズムによって私たちのことを勝手に分析されているからです。AIが仕事を助け、効率化してくれるのはありがたい一方、便利さの陰でじわりと吸い上げられていく個人の興味関心。気付けば、私自身より私のことを理解しているかも……と怖くなりますが、このような仕組みを「一種の性格占いみたいなもの」と軽やかに語り、うまく利用している人もいます。先端技術と共存していくには、扱っ人間のマインドも進化が必要なのかもしれません。

設立のねらい

当財団は、スタンレー電気株式会社の創業者北野隆春の私財提供により、生涯教育の振興をはかる目的で1975年6月23日、文部省(現文部科学省)の認可を得て発足し、2010年12月1日に公益財団法人となりました。当財団は、いつでもどこでもだれでも学べる機会をつくり、学ぼうとする方々に対し、より豊かな生きがいを持てるよう、時代が求める諸事業を展開してまいります。

生涯教育だより 第140号

2026年3月10日発行

編集人 香澤 利治

発行人 北野 七重

発行所 公益財団法人 北野生涯教育振興会

〒153-0053 東京都目黒区五本木1丁目12番16号

電話 03 (3711) 1111

表紙ギャラリー

当財団は、『出会いがドラマ、感動する心を大切に』というスローガンのもと、出会いを大切に、様々な学ぶ機会を提供してきました。人との出会いだけではなく、城や神社仏閣などの歴史的建造物や長い歴史に育まれた美しい原風景との出会いからも学ぶことは多いのではないかと考え、『世界遺産』を財団機関誌でご紹介します。

ル・コルビュジエの建築作品 —近代建築運動への顕著な貢献—

国立西洋美術館は、20世紀建築の巨匠ル・コルビュジエが設計した日本唯一の建築作品として、2016年に「ル・コルビュジエの建築作品—近代建築運動への顕著な貢献—」の構成資産の一つとして世界文化遺産に登録されました。東京・上野に建つ国立西洋美術館の本館は、竣工以来、保存と活用の両立が図られ、来館者が建築空間そのものを体感できる美術館として親しまれています。ピロティや自由な平面、自然光を取り入れる採光設計など、近代建築の理念を体現

しており、都市公園の景観と調和しつつ、時代を超えて価値を伝え続ける点も、世界文化遺産として重要な意義となっています。また、フランス政府から寄贈返還された松方コレクションを核に、西洋美術全般を広く紹介する美術館として文化交流の役割も果たしてきました。建築と美術が一体となった価値が、世界的に高く評価されています。

国立西洋美術館の詳細はこちらのURLよりご確認ください。

<https://www.nmwa.go.jp/>



国立西洋美術館 (©国立西洋美術館)



株式会社 日美 代表取締役社長

大谷 裕巳さん

OTANI HIROMI

「知りたい」を突き詰め
終わりになき学びの旅を続ける2022年から当財団の評議員を務める大谷さん。
「自身の経歴をもとに、生涯教育に対するお考えをお話いただきました。」

——「経歴をお聞かせください。」

「6歳の6月6日は茶道の初稽古」——
これが私の父の生まれでもある裏千家に代々
伝わるしきたりです。お茶の行事を手伝いな
がら育ち、大学卒業後は西武百貨店に入社。
営業企画として、催事や出店などに幅広く
携わりました。30歳の頃、母方の祖父の病氣
がきっかけで、当時宝石・貴金属の卸売会社
だった株式会社日美を引き継ぐことに。百貨
店での経験から、「いずれ海外ブランドに押し
られ、国内の宝石卸業は先細りする」と感じ、
主要事業を不動産管理へ転換することを決
断しました。経営知識の乏しい自分に務まる
のだからかと不安もありましたが、周囲の協
力もあってホテル清掃業やビルメンテナンス業へと徐々に事業を拡大。現在の経営基盤を
築くことができました。——「茶道の世界で取り組まれたことを教え
てください。」従兄弟にあたる伊住政和（裏千家家元の
弟）とグラフィック・デザイナーの田中一光氏が
中心となつて手掛けた「新しい茶の私たち」を
表現する場として、1992年に原宿クエスト
ホールにて開催された「茶美会・然」「茶美会・
素」に参加しました。本イベントでは、50名を
超えるクリエイターや作家がデザインした茶室
や茶道具を展示。茶室では実際に来場者にお
茶をもてなし、伝統と現代が交差する一大茶
事となりました。

茶室での大谷さん

フラッグフットボール
試合中の大谷さん

ゴルフもプレーします



——「余暇の過ごし方を教えてください。」

自称「トレーニングオタク」というほど体を
動かすことが好きで、学生の頃から続けてい
るフラッグフットボールは60代となった今でも
試合に出ています。最近は特に筋力の維持
を意識しており、東京と京都の会社を歩き
来する生活の中でもトレーニングは欠かしま
せん。歩き方や呼吸法まで研究しながら、自
分自身の体と向き合うことは喜びでもあり
ます。料理も趣味の一つです。外食で感動した料
理があれば、自分なりに再現してみます。具
材や調味料をあれこれ考える過程は楽し
く、完璧に近い味に仕上がった時は達成感
があります。食への追求が高じて、BBQでは
市販の炭ではなくストーブの薪を使うこと
も。扱いは難しいですが、焼き上がりがとて
もおいしくなるのですよ。——「生涯教育に対するお考えをお聞かせく
ださい。」幼い頃から「ちよい聞き、また聞き、知ったか
ぶりは良くない」と教えられてきました。た
とえ詳しい分野であつても「これで十分」と満
足せず、謙虚に学び続ける。そんな姿勢を支
えてくれる、私にとって大切な言葉です。そして、茶道は生涯教育に最も適したものの
一つだと考えています。現代の茶道は相手に「喜んでほしい」というおもてなしの場として
親しまれていますよね。一方で、その歴史をさ
かのぼると、武将たちが所作ひとつから意図
を読み合う政治的な場でもありました。時
代や目的が変わっても、「相手をとことん思い
描く」という点は変わらず根幹にあります。
お点前だけでなく、掛け軸、生花、茶器などす
べての要素に亭主の思いを込め、互いの心を通
わせようとする。茶道とは、いくら追求して
も終わることのない、学びの道なのです。

——「読者の皆さんにメッセージをお願いします。」

「一盃のお茶にも、実は多くの学びが隠されて
います。何気なく口にするそのお茶は、お茶
を点てただけでなく、茶葉を摘んだ人、運ん
だ人器を作った人など、一生会わないかもしれ
ない数多くの人たちを経て、私たちのもとに届
いています。そうした背景に思いを巡らせるこ
とも、感謝することの大切さを学ぶ入口とな
ります。ぜひ、皆さまそれぞれの日々の中で、
素敵な学びの入り口を見つけてみてください。経営とお茶文化の両輪で「学び続ける姿勢」
を体現し続けてこられた大谷さん。評議員
として、これからも学び続ける人々に寄り
添い、財団を導いてくださることを期待し
ています。